

獣医師向けの勉強会開催

大学研究室から 乳房炎治療の現状と課題、～基礎知識～ 新しい治療法の研究について学ぶ

さる十月十三日、乳房炎部会が中心となり獣医師向けの勉強会を開催しました。講師に酪農学園大学獣医学部から岩野英知准教授と樋口豪紀准教授を迎え、各診療所から若手が中心に集まりました。まずは樋口先生から「牛マイコプラズマ性感染症の現状と課題」マイコプラズマの基礎知識」と題して、特にマイコプラズマ性乳房炎について話をしていたいただきました。細菌とウイルスの間をとったような性格のマイコプラズマは乳房炎だけでなく肺炎や関節炎の原因となります。子牛の耳垂れも起こします。あまり聞き慣れない名前かもしれませんが、新しい病原菌というわけではありません。普段診療所で行っている乳房炎検査ではマイコプラズマを増やせないで、検査は外部機関に依頼しています。また、一日二日でどんどん増える大腸菌や黄色ブドウ球菌と異なり、顕微鏡で観察できるまでに一週間以上かかるなど少々曲者なのです。樋口先生の研究室ではマイコプラズマの診断をより早くできる方法を研究・実用化し、現場で大きな力となっています。

ます。感染力が強い、症状が激しい場合が多い（乳があがる、乳房がガチガチ）、治療に反応しづらいなど、普段顔なじみの乳房炎とは性格が異なるマイコプラズマ性乳房炎ですが、黄色ブドウ球菌と同じく伝染性乳房炎に分類され、搾乳を介しての感染拡大が大きな割合を占めます。搾乳手順・搾乳衛生の遵守など、基本が大切なことになりはありませぬ。近年増加傾向にあるこの乳房炎に対する基礎知識をゲットしました。

続いて岩野先生から「黄色ブドウ球菌に対する特異的なファージを用いたウシ乳房炎治療の可能性を探る」というお話。…要するに、ファージというウイルスで乳房炎の原因菌・黄色ブドウ球菌をやっつけよう！という話です。私たちがインフルエンザウイルスに感染すると、具合が悪くなるように、黄色ブドウ球菌や大腸菌もファージというウイルスに感染すると具合が悪くなり死んでしまいます。ファージは河川、海洋、土壌、生き物の腸の中など細菌がいる所ならばどこにでも存在します。好き嫌いが激しく、黄色ブドウ球菌のファージは黄色ブドウ球菌にだけ感染します。この研究には釧路の診療所で検査した乳房炎サンプルが用いられ、ファージは下水から集めたものだそうです。大学の研究というとカタイ感じですが、乳房炎乳と下水、なんとなく身近に感じませんか？下水にいるおびただしい数のファージから黄色ブドウ球菌好きのファージを選びだし、抗生物質の代わりにしたい、という研究です。実用化までの道のりはまだまだ長いのでしょうか、抗生物質を使わない新しい治療法に期待が高まります。

アプローチはそれぞれ異なりますが、二人とも今の酪農の現状をもとに、農家さんにとっても、現場の獣医師にとっても有益な研究をしてくださっています。両講師の知的な声と流れるような講義にうっとりしながら、気分はまるで大学生。しかしここで眠らないのが社会人。日々の進化に後れをとらぬよう耳を大きくし勉強してきました。またこのような機会があるとうれしく思います。

（浜中診療課 廣瀬 与志乃）